

TEachOtherS を使用した授業の有効性と結果分析

北村雅則(名古屋学院大), 山口昌也(国立国語研究所)

概要

- TEachOtherSが望まれる背景(問題の所在)
- TEachOtherSの適用事例(悪文添削・作文課題)の紹介
- 結果分析(誤りに対する「気づき」と「修正」の観点から)
- 今後の課題

■ 悪文添削課題

■ 目的と試み

- 文章表現における必修基本事項(多くの市販教科書にも立項)
 - 外国語ほど知識の量と添削結果が相関しない(母語話者の内省が働く)
 - どのような誤りの種類に気づく(気づけない)のか
 - どのような誤りなら内容を修正できる(できない)のか
- 教材開発に役立つ

■ 授業の導入部

悪文となる要因の説明

1. 誤字・脱字
2. 口語表現
3. 文体
4. 主語・述語の不一致
5. 自動詞・他動詞
6. 呼応表現
7. 修飾関係
8. 一文の長さ

■ 学習者の活動

- 悪文添削課題の中の不適切な箇所をマークアップ。
- どのような種類の誤りかを選択。
- 適切な表現に修正。

■ 作文課題

■ 学習内容

- 「十年後の自分はどうか」について600字程度で論じる。
- レポートとして適切な表現, 言葉遣いをする。
- レポートとしての体裁や内容上, 必要不可欠な項目(必須記述項目)について理解する。

■ システムによる支援

- 必須記述項目の有無と喚起
 1. 作文タイトル
 2. 氏名
 3. 十年後の目標
 4. 目標を設定する理由
 5. 現在の自分の状況
 6. 目標に向けてしなければいけない努力

■ 背景

■ 教師側の問題

- どのような内容を教授するか
- 経験に基づく内容設定
- 国語教育を専門とはしない教員も担当

■ 学習者の問題

- 基礎学力不足(初歩的な箇所をつまずく)
- 作文学習は未経験(小中高では重視されず)
- 作文学習の忌避と受動的な学習

■ 環境

- 対象・規模: 大学1年生 1クラス20~30名 × 4
- 使用機器: 学習者個人所有のノート型PC, 有線LAN
- 内容・時間: 課題1(2コマ), 課題2(1コマ), 課題3(1コマ)

■ 運用結果と分析

● 悪文課題

- 課題1: 一文の中に1つまたは複数ある一種類の誤りを添削する課題
- 課題2: 文章中にちりばめられた誤りを添削する課題
- 評価項目: マークアップされた添削種目の正解率／添削内容の正解率

【悪文課題の結果】

課題1	添削数	添削種目正解	添削内容正解	内容正解／種目正解	内容正解／種目不正解
平均	78.6	78.4%	82.3%	86.7%	75.2%

課題2	添削数	添削種目正解	添削内容正解	内容正解／種目正解	内容正解／種目不正解
1.誤字・脱字	254	97.6%	99.6%	99.6%	100.0%
2.口語表現	606	86.6%	96.9%	97.0%	96.3%
3.文体	95	57.9%	80.0%	87.3%	70.0%
4.主述の不一致	35	37.1%	57.1%	53.8%	45.5%
5.自動詞・他動詞	50	46.0%	98.0%	100.0%	96.3%
6.呼応表現	62	21.0%	66.1%	84.6%	61.2%
7.修飾関係	96	21.9%	55.2%	85.7%	46.7%
8.一文の長さ	33	69.7%	60.6%	69.6%	40.0%
9.その他	184		81.5%		
平均	153.9	54.7%	77.2%	87.6%	69.5%

※ は平均値を大幅に上回る数値 は平均値をやや上回る数値

● 分析

■ 実験結果の概要

- 添削種目と添削内容の正解率は基本的に相関関係にある(参照:課題1)。
 - ・誤りの種類・要因に気づくと、正せる可能性が高くなる。
 - ・誤りの種類・要因に気づかないと、誤りの発見・修正が難しくなる。
- 添削種目の正解率が低くても添削内容の正解率が高い項目もある。
 - ・どのような誤りかは気づかなくても、誤りの修正が可能。(5..自動詞・他動詞)
- 添削種目の成立が高くても添削内容の正解率が低い項目もある。(8.一文の長さ)

■ implicit knowledge と explicit knowledge

- implicit knowledge: ネイティブが持つ、無意識・無自覚に操れる言語感覚
- explicit knowledge: 明示的に説明できる(文法)知識

■ implicit knowledge と explicit knowledge との関連性

- 添削種目・添削内容がともに正解
→ implicit knowledge と explicit knowledge の両方で裏付けられた知識
→ 誤りの把握と修正が知識で裏付けられている(ex: 添削種目(1)(2))
- 添削種目不正解－添削内容正解
→ implicit knowledge レベルでの判断
→ 誤りの種目が分からなくても、文章の違和感に反応し修正に成功(ex: (3)(5))
- 添削種目正解－添削内容不正解
→ explicit knowledge の習得不足
→ 誤りの種目には気づいたが、修正の仕方が分からない(ex(8))
- 添削種目・添削内容がともに不正解
→ explicit knowledge の習得不足
→ 誤りの種目が分からず、どのように直せばよいかも分からない(ex: (4)(6)(7))

■ 結論

- i・ii は implicit knowledge レベルの問題であり、「気づく」ことが重要
- iii・iv は explicit knowledge レベルの問題であり、誤りの要因や修正の学習が必要

● 作文課題

【作文課題に対する教師による添削結果】

1.誤字・脱字	2.口語表現	3.文体	4.主述の不一致	5.自他動詞
58(20.9%)	150(54.0%)	24(8.6%)	18(6.5%)	0(0.0%)
6.呼応表現	7.修飾関係	8.一文の長さ	9.説明不足	10.冗長
9(3.2%)	4(1.4%)	6(2.2%)	3(1.1%)	6(2.2%)

- 誤字・脱字, 口語表現に誤りが集中(implicit knowledgeレベルの問題)
- 誤りに対する「気づき」を促すような工夫が必要
→ 特定の表現に誤りが集中(例: 文頭の「なので」、一人称「僕」など)

■ 今後の課題

- 設定の簡便化や設定変更の柔軟性向上
- 学習者に対して、誤りに対する「気づき」を促すような支援機能の拡充
→ 口語表現, 文体チェックについては機械チェックの精度向上が有効
- 教材開発・授業資料としても活用できるような教師用支援機能のさらなる強化